



Title	補助動詞「-てくれる」の用法とその指導の一提案 : 「依頼」「非難」「皮肉」用法を対象として
Author(s)	ソンダ, サンジャヤ; チャランポン, スパーナン; 三輪, 若奈
Citation	阪大日本語教育学研究. 2022, 13, p. 55-84
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/87639
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

補助動詞「-てくれる」の用法とその指導の一提案

— 「依頼」「非難」「皮肉」用法を対象として —

ソンダ・サンジャヤ、チャランボン・スパーナン、三輪若奈（五十音順）

1. はじめに

補助動詞「-てくれる」は、従来、主に【恩恵】の観点から論じられてきた。日本語教育の現場では、他の補助動詞に比べ、比較的早い段階で取り扱われる文法項目であり、補助動詞「-てあげる」「-てもらう」と共に、【恩恵】を表すものとして教授される。その際の例文には、以下のようなものが挙げられる。

(1) 友だちが私の宿題を手伝ってくれた。

補助動詞「-てもらう」との使い分けという問題はあるが、授受動詞「あげる」「もらう」「くれる」で、物質的恩恵のやり取り表現を学んだ学習者にとって、補助動詞「-てくれる」の【恩恵】としての用法を理解すること自体は、さほど難しくないように思える。

一方、補助動詞「-てくれる」は、【恩恵】とは言い難い場面においても使用される。以下は、日本語母語話者同士の雑談を文字化した『名大会話コーパス』に収録された発話である。

(2) もうちょっとこっち寄ってくれる。

(3) くだんないことやめてくれる。

(4) 本当にも一いろいろとまあ、問題起こしてくれる。

これらの「-てくれる」を用いた発話に、【恩恵】の意図は感じられず、それぞれ、【依頼】【非難】【皮肉】として捉えるのが適当ではないかと考える。これらの【恩恵】以外の用法は、日本語教育の現場で取り扱われることが少なく、指導法の検討も不十分であると考えられる。本稿では、日本語母語話者の【依頼】【非難】【皮肉】用法で用いられる補助動詞「-てくれる」を収集・分析することを通し、その適切な使用場面を探るとともに、日本語教育における指導案や留意点を提案することを目指す。

2. 先行研究

2.1. 【恩恵】を表す「-てくれる」

補助動詞「-てくれる」を取り扱う先行研究の多くは、前述した通り、恩恵性を中心に論じている。原田（2006）は、授受表現、特に「-てくれる」と敬意表現の関わりについ

て、「-てくれる」を、「話者が受ける利益・恩恵を、無生の物を含む自然物から与えられる恩恵と見なし、話者が直接的・間接的に恩恵を受ける対象であることを認知するもの」であるとした。また、金（2009）は、「-てくれる」の用法を、基本的意味と3つの周辺的意味にまとめた。周辺的意味には、1）行為者の行為に実際は恩恵意図が含まれなくても、恩恵意図があるかのように見なす「恩恵意図付与用法」、2）人間一般にとって恩恵になるものとして、物事のよい作用を表す「恩恵対象一般化用法」、許可文の中で許可される行為者の意図を認めることで行為の決定権を話し手から行為者に移譲し、丁寧さを表す「行為決定権移譲用法」があるとした。以下に金（2009）で挙げられているそれぞれの例文を示す。

- (5) 赤ちゃんが歩いてくれた。（恩恵意図付与用法）
- (6) 乳酸菌は腸内環境を整えてくれる。（恩恵対象一般化用法）
- (7) 遠いから、わざわざ来てくれなくてもいいよ。（行為決定権移譲用法）

これらの先行研究は、補助動詞「-てくれる」は、行為者によって既に行われた行為が、行為者の有生・無生、恩恵意図の有無にかかわらず、その行為の受け手でもある話し手にとって好ましいもの（恩恵）であるという考え方に基づいているようである。しかしながら、この考え方に基づく場合、まだ行なわれていない行為の実行を要求する【依頼】や、行為者の行為を好ましくないものとして表明する【非難】【皮肉】の用法を考えることは不可能である。そのため、これらの先行研究だけでは、補助動詞「-てくれる」のよりは静的な用法まで考える上では不十分な面がある。

2.2. 恩恵性の再考

授受動詞「くれる」が「恩恵性」を基本とされてきたことに疑問を投げかけたものに尾鼻（2017）がある。尾鼻（2017）は、以下のような、否定的な意味を持つ発話の例をもとに、「くれる」について考察を行なった。

- (8) 色々やってくれるな、最近の学生は。
- (9) よくも殴ってくれたわね。

その上で、話者の視点から眺めて、話し手が自分に向かってきたもの、あるいは向かってくるかのように捉えた現象に対して、どのように判断するかは、コンテキストや話し手の意図によって理解できるのであり、「くれる」そのものが主観的判断を直接伝えるのではなく、「くれる」という語彙自体が「恩恵性」を備えているわけでもない指摘した。

また、山本（2007）も、恩恵的ではない事態に対して、恩恵を表す「-てくれる」を用いることで【皮肉】を表す表現について述べており、「-てくれる」を付与することによっ

て、ある自体に対する話し手の感情的評価をより示すことができると指摘した。以下は、木村（2007）に挙げられた、話し手が受益者ではなく被害者の立場にある例文である。

(10) 子どもがおもらしをして

- a. うわー、いいところでヤッテクレタね。
- b. うわー、いいところでヤッタね。

尾鼻（2017）の授受動詞「くれる」への指摘同様、補助動詞「-てくれる」は、それ自体が好ましい事柄としての【恩恵】に確実に結びつくわけではなく、山本（2007）の指摘にある通り、あえて【恩恵】が主たる意味として存在する補助動詞「-てくれる」を付与することで、話し手の感情的評価などの意図が加わり、異なる用法として用いられているのではないかと考えられる。

そのため、実際の日本語母語話者による補助動詞「-てくれる」の使用状況を分析・考察し、どのようなコンテキストの中で、どのような意図を持って使用されているのかを明らかにする必要がある。

2.3. 依頼における丁寧さと負担度

本稿で取り扱う【依頼】【非難】【皮肉】用法のうち、【依頼】の適切な使用場面を考える上では、丁寧さの程度や、依頼内容の負担度を考慮すべきである。

2.3.1. 依頼における丁寧さ

まず、補助動詞「-てくれる」がどの程度の丁寧さを示すのかを考える。ズルフィカル（2017）は、男女それぞれ12名を対象としたアンケート調査を行ない、日本語の依頼表現における丁寧度を調査した。アンケート調査は二度行なわれており、1回目では、「日本人学生が相手の男性／女性にどのような依頼表現を使うか」について、調査を行なった。このアンケート調査では、25種類の依頼表現に対し、「女性の先生」「男性の先生」「女性の先輩」「男性の先輩」「女性の友人」「男性の友人」に、その依頼表現の使用頻度を問うもので、選択肢は、「使わない」「たまに使う」「よく使う」が用意された。2回目の調査では、103種類に分類した依頼表現について、2つずつの組み合わせを用意し、その2つで「丁寧度の評価がどのように変わるか」についてアンケート調査を行なった。選択肢は、「より丁寧」「同じ」であり、「同じ」を選んだ場合は、まず一番に使おうとする方を選ぶように指示した。その結果、「肯定文→否定文」、「授→受」、「肯定文→疑問文」、「断定→推量」、「終助詞を付加する→負荷しない」によって、丁寧さを高めることができた。この結果から、補助動詞「-てくれる」は、授受表現の「授」にあたる表現であり、丁寧さの程度は「受」にあたる「-てもらう」よりも低いことが考えられる。しかし、否定文の「-てくれない」の形式にすることで、丁寧さの程度を高めることは可能だろう。

また、林・玉岡（2010）は、日本語では肯定疑問形より否定疑問形の方が丁寧な感じがすることが、敬語や待遇表現の先行研究において指摘されてきたとし、否定疑問形は、相手に押し付ける感じが弱く、否定する余地を多く与えるような印象を与えるがゆえに肯定疑問形よりも丁寧な感じがするとした菊池（1997）を例に挙げた。その上で、林・玉岡（2010）は、動作主自身の動作が話し手の期待に直接関係している場合、否定疑問形が相手に「依頼」よりも「命令」の機能を際立たせる場合もあり、否定疑問形の方が肯定疑問形よりも丁寧と一概には言えないと指摘した。その一例として、以下のような状況を挙げている。

(11) （映画館などで立っている人に対して）

- a. 座ってくださいますか。
- b. 座ってくださいませんか。

林・玉岡（2010）は、このような場合においては、bのように否定表現である「座ってくださいませんか」を使用した場合、「ぐずぐずしないで」「じゃまになるから」のような反語的な意味を内包しているケースもあると指摘した。

補助動詞「-てくれる」の付与は、相手の「授」の立場に立つ表現であるため、「-てもらおう」などと比べた場合、それほど丁寧とは言い難い。丁寧度を上げる場合には、否定文の形である「-てくれない」を使用するなどの方法があるが、必ずしも丁寧度が上がると一概に言えるわけではないため、文脈や依頼内容の負担度についても考慮した上で考える視点を持つことが重要である。

2.3.2. 依頼における依頼内容の負担度

依頼内容の負担度を調査したものには、呉（2020）が挙げられる。呉（2020）は、二十代から三十代の日本語学習者である中国人 10 名と日本人 10 名を対象に、依頼をする場面とされる場面における負担度についてランク付けのアンケート調査を行なった。依頼の相手は、「先生」「先輩」「友人」で、その中でもそれぞれ「親」「疎」に区分した 6 つの相手が設定されており、負担度は、低い順に 1 から 9 が設定されている。日本人 10 名について、依頼をする場面では、どのような依頼内容であっても、依頼者と依頼相手との親疎関係による負担度の差はなかった。依頼内容については、「本を貸す」「文法を修正する」「アンケートに答える」といった依頼内容は負担度が低いのに対し、「緊急連絡人になる」「お金を貸す」といった依頼内容は負担度が高い結果となった。このことから、依頼をする立場では、相手との親しさに関係なく、依頼内容の負担度を判断していることと、金銭や個人情報に関与する事柄や、責任が重い事柄は、相手への負担度が高いと判断していることが分かる。一方で、依頼をされる立場となった場合は、親疎関係や立場による負担度の差異が見られた。目上からの依頼は、「本を貸す」「携帯電話を貸す」が最も負担度

が低く、同等の相手からの依頼は、「本を貸す」「アンケートに答える」が最も負担度が低い結果となった。負担度の高いものについては、親しい目上からの依頼は、「会場を準備する」「発表会の司会」、親しくない目上からの依頼は、「発表会の司会」「空港へ迎えに行く」、同等の相手からの依頼は、親疎関わらず「緊急連絡人になる」「お金を貸す」であった。このことから、自分がすぐできる事柄や、手間がかからない事柄に対しては、相手が誰であれ、負担を感じずに受けることができる一方で、うまくできるか分からない事柄、手間やお金がかかる事柄、自身の個人情報に関わる事柄が依頼内容である場合は、負担度が大きくなり、受け入れづらくなることが分かる。

2.4. 先行研究まとめ

このように、補助動詞「-てくれる」には【恩恵】以外の用法が存在しているが、【依頼】【非難】【皮肉】用法については、あまり検討されていないのが現状である。実際の日本語母語話者の会話で使用される以上、日本語教育における適切な使用場面を考えることは必要であろう。その際、【依頼】用法に関しては、他に様々な依頼表現がある中で、補助動詞「-てくれる」を用いた形式の依頼にどのような意味があるのか、その丁寧さの程度や依頼内容の負担度が、他の依頼表現と比べてどのようなものであるのかを検討する必要があると考える。

3. 日本語教育での扱われ方

補助動詞「-てくれる」が恩恵性を中心に考えられているとは言え、【恩恵】以外の用法が存在しているのも事実である。では、実際の日本語教育現場では、補助動詞「-てくれる」はどのように取り扱われているのだろうか。本章では、初級教科書と中級・中上級教科書、さらに日本語教師向けの文法解説書において、補助動詞「-てくれる」がどのように取り扱われているのかを概観していく。

3.1. 初級日本語教科書における補助動詞「-てくれる」

補助動詞「-てくれる」は、『みんなの日本語』では第24課に、『初級日本語げんき』では第16課に「-てもらう」「-てあげる」と共に登場し、「-てもらう」「-てあげる」同様、恩恵の授受表現として扱われている。授受動詞「くれる」「もらう」「あげる」が物質的恩恵のやり取りに用いられていることもあり、学習者がこれらの補助動詞を【恩恵】用法を持つものとして捉えるのはさほど難しいことではないように思われる。

3.2. 中級日本語教科書における補助動詞「-てくれる」

中級・中上級日本語教科書である『みんなの日本語中級Ⅰ』『みんなの日本語中級Ⅱ』のどちらにおいても、補助動詞「-てくれる」の用法はほとんど触れられていない。『みんなの日本語中級Ⅰ』の第12課において、【恩恵】の用法として現れるが、「おかげで」の

用例の文章中に現れたのみで、「-てくれる」の説明などは一切なされていない。中級以降では、補助動詞「-てくれる」はあまり扱われないようである。これは、栗田（2019）の、日本語教育では初級半ばから後半まで「-てくれる」を用いる文のような受益構文を導入するが、それ以降は、段階的に難易度を上げて用例を教えることが少ないように思われるという指摘に一致する。

3.3. 文法解説書における補助動詞「-てくれる」

『初級日本語文法と教え方のポイント』では、「動作のやりもらい（授受）」として、「-てあげる」「-てもらう」と共に登場した。動作のやりもらい（授受）について、補助動詞「-てくれる」は、話し手「私」の（利益・恩恵を受けた）感謝の気持ちが表されていると述べられている。また、「-てくれる」を用いない場合は、事務的に述べている感じがすると指摘されており、「-てくれる」は人間関係や場面に配慮した待遇表現であると説明されている。

『日本語の教え方の秘訣 上『新日本語の基礎 I』のくわしい教案と教授法』では、「くれる」「-てくれる」は、二人称、三人称間の物、恩恵の授受表現として捉えられている。話し手からは特にお願いをしていないが、行為者が親切心から話し手のためにやってくれたと述べる表現として扱われている。また、授受表現の注意点として、誰が物や恩恵を授け、誰がそれを受けたのかを正しく理解することが重要であると指摘されている。

このように、日本語教師向けの解説書でも、補助動詞「-てくれる」は、【恩恵】の用法を持つものとしてのみ取り扱われているようである。しかし、「-てくれる」が、人間関係や場面に配慮した待遇表現であるという指摘は、【依頼】【非難】【皮肉】にとつながる重要なものであると思われる。話し手は、本来なくていいはずの補助動詞を無意識であるとしても意図的に付与しているのであり、この言語使用から、話し手が何を意識し、何に配慮しているのかを明らかにする必要があるようである。

3.4. 日本語教育における補助動詞「-てくれる」の扱い

以上から、日本語教育において、補助動詞「-てくれる」は、初級段階で【恩恵】用法が扱われるが、中級以降、他の用法は扱われていないことが分かった。しかしながら、補助動詞「-てくれる」には、【依頼】や、【非難】【皮肉】といった【恩恵】から派生したと考えられる用法も存在している。そのため、それを日本語教育にどのように導入すればよいか、教科書に加える場合、どのように取り扱えばよいかを考えることには意味があると考えられる。

現状、補助動詞「-てくれる」の【恩恵】以外の用法は、日本語教育の現場で取り扱われることが少ないため、日本語学習者がこれらの用法の使用はもちろん、理解すらできていない可能性が高い。これら3用法の理解・使用の必要性について考える。【依頼】は、日本語学習者が使用する機会の多いものであり、理解・使用が共にできるようになることが

望ましい。一方、【非難】【皮肉】に関しては、聞き手の気分を害する可能性が高い表現であり、安易に使用を勧めることは避けるべきであるが、理解の必要はあると考える。話し手が【非難】【皮肉】として発話しているにも関わらず、「-てくれる」の付与によって【恩恵】であると勘違いした場合、適切な反応ができず、不要なトラブルに繋がる可能性があるためである。

補助動詞「-てくれる」の【恩恵】以外の用法を、具体的に日本語教育に組み込むためには、これらの用法がどのような場面で用いられているのかを明らかにする必要があると考え、実際の日本語母語話者の会話で用いられた、【依頼】【非難】【皮肉】用法の「-てくれる」を収集・分析する。

4. 分析方法

4.1. 使用データ

本稿の調査では、名大会話コーパス (<https://mmsrv.ninjal.ac.jp/nucc/>) を使用する。本コーパスには、129 会話、合計約 100 時間の日本語母語話者同士の雑談が文字化されたものが収録されている。今回、収集・分析の対象とする【依頼】【非難】【皮肉】用法は、独話形式では現れづらいと判断し、本コーパスを使用することとした。【依頼】は、相手がいて初めて成り立つ行為であるため、話し手の発話に応じてくれる聞き手の存在しない独話で現れる可能性は低いと言えるだろう。【非難】用法も【皮肉】用法も、特に親しくない間柄では、聞き手に対して不快な感情を与える危険性が高いため、講演などの独話の場でわざわざ使用する状況は極めて限られていると考え、二名の参加者による雑談会話が収録された本コーパスを採用することとした。

4.2. 分析方法

名大会話コーパスの文字列検索で、「てくれる」「てくれた」「てくれて」「てくれない」「てくれます」「てくれました」「てくれまして」「てくれません」の 8 つの表現を検索する。そこで出てきた発話を、前後の会話を踏まえた上で、母語話者である筆者（三輪）が確認し、その用法を【恩恵】【依頼】【非難】【皮肉】【その他】に分類する。【その他】は、金（2009）の挙げた周辺の用法や、どれにも当てはまらないと判断されたものを対象としている。その後、【依頼】【非難】【皮肉】用法について、前後の会話を含め、どのようなコンテキストの中で、どのような意図をもって、補助動詞「-てくれる」が使用されているのかを分析する。

分析の観点は、1) 誰が誰に、2) 話し手と聞き手の関係性、3) 会話が行なわれた場所、4) 活用形式、5) 共起表現、6) 発話が生じた場面、7) 発話の目的である。6) は、前後のコンテキストを確認した上で、何が行なわれようとしている、あるいは発話されようとしている場面かを確認する。また、7) の発話の目的は、話し手の内面を第三者である筆者が完全に計り知ることは不可能であるが、聞き手の反応などから、聞き手にどのよ

うな働きかけをしようとしたか判断することとした。

4.3. 【依頼】【非難】【皮肉】の定義

収集したデータをもとに、【依頼】【非難】【皮肉】を以下のように定義した。本稿における【依頼】とは、話し手が聞き手に何かの行動をするように求めるものである。強制力のある【命令】ではないため、その行動を実際に行なうか行わないかの選択は聞き手に委ねられるものとする。【非難】と【皮肉】は区別が難しいが、【非難】は、行為者が現在している、あるいはしていたことによって生じた現在の状況が、話し手にとって「好ましくない」ため、現状と反する行動を行なうことを要求するものとした。また、【皮肉】は、太田（2017）の「思っていることと反対のことを言う」という定義を参考に、恩恵性を感じない行動に恩恵性を感じているかのように表明するものとした。

5. 結果と考察

名大会話コーパスで、補助動詞「-てくれる」の各種活用形式における文字列検索を行ない、各発話における用法の分類を行なった結果を以下の表に示す。縦に補助動詞「-てくれる」の活用形式を、横に補助動詞「-てくれる」の用法を並べた。【その他】にあたる用法は、【恩恵】【依頼】【非難】【皮肉】のいずれにも該当しない、あるいは判断が困難であったものである。数字は出現回数を表し、括弧内の数字は全体の内の割合（パーセンテージ）を表す。なお、パーセンテージは小数点第二位を四捨五入したものである。

活用形式 \ 用法	恩恵	依頼	非難	皮肉	その他	合計
てくれる	234(90)	16(6.1)	5(1.9)	3(1.1)	3(1.1)	261(100)
てくれた	134(95.7)	0(0)	0(0)	3(2.1)	3(2.1)	140(100)
てくれて	131(96.3)	0(0)	0(0)	1(0.7)	4(2.9)	136(100)
てくれない	61(96.8)	1(1.6)	1(1.6)	0(0)	0(0)	63(100)
てくれます	7(70)	2(20)	0(0)	0(0)	1(10)	10(100)
てくれました	2(100)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	2(100)
てくれまして	0(-)	0(-)	0(-)	0(-)	0(-)	0(100)
てくれません	1(20)	3(60)	0	0	1(20)	5(100)
合計	570(92.4)	22(3.6)	6(1)	7(1.1)	12(1.9)	617(100)

表1：名大会話コーパス内の補助動詞「-てくれる」の各種出現回数

コーパスに出現した用法を分類した結果、やはり、【恩恵】用法が最も多くはなったものの、【依頼】【非難】【皮肉】用法も使用されていることが分かった。ただし、その出現数はかなり数が限られており、特に【非難】【皮肉】はそれほど頻繁に使われている用法

ではないことも明らかである。そのため、学習者が使用まではできずとも、理解さえできれば十分であると考えられる。

本章では、この【依頼】【非難】【皮肉】用法それぞれについて、分析・考察を行なう。分析方法は前章で示した通りである。便宜上、発話には行番号を付与し、補助動詞「-てくれる」が用いられた箇所には下線を引く。

5.1. 【依頼】用法

以下では、【依頼】用法の補助動詞「-てくれる」について分析・考察を行なう。

5.1.1. 会話例1 「もうちょっとこっち寄ってくれる」(名大会話コーパス・データ 103)

この会話は、【A が B に】対して発話している。二人の関係性は【友人】であり、会話が行なわれたのは【A の自宅】である。活用形式は【てくれる】で、共起表現は【寄る】であった。発話は、【A が写真を撮ろうとしている】場面で行なわれ、A の発話の目的は、【写真撮影のために A のそばに寄るように B に依頼すること】である。

[名大会話コーパス・データ 103]

01B: ちょっと止めまーす。

<録音中断>

02A: どうしよう、台が映ってる。もうちょっとこっち寄ってくれる。

03B: 世界地図入んない？

04A: 入る。もう何入っても許して。布団も入るし、*菓子*も入るしみんな入る。

05A: でもさー、ああいうの送ってくる写真ってさー、いろんなもん入ってるよ。

06A: (うん) 1 足す 1 は一。

07B: に一。

08A: ごめん、私ほんつとにぶれると思う。

09B: だいじょぶよ。A もそれ撮ろうよ。

10A: じゃ、これだけ。1 回だけね。

この会話は、01 行目で B によって収録が中断されている。その後、録音が再開された際、A は、写真を撮るにあたり、02 行目で、B に対して「もうちょっとこっち寄ってくれる。」と発話している。B はこの発話に対して、03 行目で「世界地図入んない？」と問いかけを行ない、A は 04 行目で、その問いかけに対して、まず「入る」と応答した上で、「もう何入っても許して。布団も入るし、*菓子*も入るしみんな入る。」と付け加える。続く 06 行目の「1 足す 1 は一。」という呼びかけに対し、07 行目で B が「に一。」と応じているが、これは、写真を撮る際の典型的なかけ声であり、この段階で写真撮影の準

備が整っていると考えられる。すなわち、02 行目の「もうちょっとこっち寄ってくれ
る。」という発話は依頼であり、06 行目において、その依頼が達成されていることが分か
る。

ここで、B が、その依頼に対して、明確な許諾あるいは拒否をしていないことに注目し
たい。依頼に対しての受諾・拒否が生じていないことから、この依頼は、あまり正式に頼
まれた、言い換えれば形式的な依頼であるように感じられない。しかし、深刻・重要では
ない依頼であると考えた場合、彼らが友人関係であることを考慮すると、動詞単体の「も
うちょっとこっち寄って」でも依頼は十分に達成できると考える。ここで、補助動詞「-て
くれる」をわざわざ付与する理由について考えたい。

ここまでで述べた通り、補助動詞「-てくれる」には、【恩恵】としての用法、認識が広
く理解されていると考えられる。「もうちょっとこっち寄って」だけの発話の場合、依頼
ではあるものの、B が必ずしなければならないことをするように促す、【指示】【命令】の
色合いが強くなるのではないだろうか。補助動詞「-てくれる」を使用することによって、
話し手である A は、「自分が B からの行為を受け取る立場」にいることを表明し、【指示】
【命令】の色合いを弱めると同時に、「それを受け取ることが A にとって恩恵的である」
ことを含意できるだろう。また、先述した通り、この依頼があまり正式ではなく、受諾・
拒否の決定の自由が聞き手に大きく委ねられている中で、B による依頼の受諾を A が望ま
しく思っていることを示すことで、B が受諾してくれる可能性を高めたとも考えられる。

「-てくれる」を用いた依頼表現は、常体ということもあり、比較的親しい間柄、あるいは
上の立場から下の立場への依頼でしか使えないように思える。そこで、敬体である「-て
くれます」を用いた依頼と、ズルフィカル（2017）を参考に、丁寧さの度合いの上がる否
定形「てくれない」での依頼を分析したい。ただし、この否定疑問形が必ずしも丁寧にな
るわけではないという林・玉岡（2010）の指摘も留意しておく。

5.1.2. 会話例 2：「F050 さん来てくれます？」（名大会話コーパス・データ 084）

この会話は、【F146 が F050 に】対して発話している。二人の関係性は【先輩（F050）
と後輩（F146）】であり、会話が行われたのは【喫茶店】である。活用形式は【てくれま
す】で、共起表現は【来る】であった。発話は、【旅行について話している】場面で行わ
れ、F146 の発話の目的は、【ツアーを開催した場合に F050 が来るように依頼すること】
である。

[名大会話コーパス・データ 084]

01F050：行けそうで行けないなー。

02F050：1 度行きたいなと思ってるんだけど。（うん）母は行ったのかな。

03F050：すごいよかったって。

04F146：東北に？

05F050：うん、東北の、その祭りを。
06F146：ねぶた？
07F050：ねぶたとあといくつか。
08F146：***。
09F050：かなー。なんか3つぐらい行っただけ。
10F146：ほんとー。
11F050：うん。バスで、回っていくツアー。
12F146：うん。今度ツアーを企画したら、あの、F050 さん来てくれます？
13F050：うん。ツアー企画してくれたら、私だけじゃなくて、
14F146：I ちゃんとかもなんか、(うん) 来るかもしれない。(うん)
15F050：J 君も行きたいって言ってたから。
16F146：日本の夏はいいよねー。
17F050：うん。お祭りがあるしねー。
18F146：ねー。

二人は旅行について話しており、F050 は、02 行目から 03 行目にかけて、自身の母親が東北の祭りに行ったことがある旨を発話している。それに対して、F146 は詳細を質問していき、09F050 は、「なんか3つぐらい行っただけ」と母親が東北の3つの祭りへ行ったことを語った上で、11F050 で「バスで、回っていくツアー」と、母親の東北旅行がツアーによるものであったと語る。それに対して、F146 は 12 行目で「今度ツアーを企画したら、あの、F050 さんも来てくれます？」と発話した。それに対し、13 行目で F050 は、「うん」と応じ、「ツアー企画してくれたら、私だけじゃなくて」と話を展開していく。その後、二人は、他の友人も参加するであろうことや、日本の夏はお祭りがあっていいといった内容の会話を続けていく。

この会話では、F146 が、丁寧体で「F050 さん、来てくれます？」と依頼を行なっている。この発話以外で、F146 は常体を使って話していることから、少し改まって発話していることが分かる。「来てください」ではなく、「来てくれます？」という形での依頼だが、これは、「来てください」が、拒否しづらい強い依頼に聞こえてしまうためだと考えられる。補助動詞「-てくれる」を付与した結果、選択の余地を先輩である F050 に委ねると共に、F050 がツアーに来ることが、F146 にとっての恩恵になり得るという心情を発話に含ませることができたと考えられる。また、この二人が親しい間柄で、他の発話では常体を使っていることから、「来てくれる？」でも問題はないが、「ツアー参加」という依頼内容は、時間や手間のかかる行為であるため、その負担度を考慮すると共に、依頼を受諾してもらうために、少しでも丁寧な印象を与えるために行なったのではないかと推測できる。

5.1.3. 会話例3：「ちょっと来てくれない」（名大会話コーパス・データ 012）

この会話は、【F017 が F102 に】対して発話しているが、これは、F107 による別の人物の発話の再現である。そのため、この発話が本当にこの通りの形式で行われた確証を得ることはできないが、わざわざ「-てくれない」の形式で発話の再現を行なったことには何らかの意図があると考え、分析・考察を行なう。

本来、この発話は、【F017 の知り合いで日本語教師をしている人物の知り合いがその F017 の知り合いに】対して発話している。二人の関係は【知り合い】であり、会話が行われた場所は【不明】である。活用形式は【てくれない】で、共起表現は【来る】であった。発話の場面は【不明】であり、F017 の知り合いで日本語教師をしている人物の知り合いの発話の目的は、【日本語教師として来る（働く）ように依頼すること】である。

[名大会話コーパス・データ 012]

- 01F017：だからそういうのって、企業に雇われる日本語の先生って、
02F107：どうやったらなれるんだろう。
03F102：ああ、あたしもそう思いました。
04F017：で、（何か）聞いてみたのね、（はい）そのやってる人に。
05F017：（うん）したら、知り合いがやっぱりそういうところの、
06F017：あの、何部、じ、人事部なのか何部なのかよくわかんないけど。
07F102：いわゆるコネですね。
08F017：そうそうそう、そういうので、あなた先生やってるからちょっと来てくれない、
09F017：お給料出すわっていう話で言ったんだって。
10F102：ふーん、そうなると何か、あの、秘書みたいに、何ですかね、
11F102：会話を英訳してやる人と違って、（あー、うん）
12F102：何かほんとに（うん、日本語の先生）教えるって感じですね。
13F017：うん。だから教課書使ってやってるらしい。
14F017：そういう人がね、何か 2 人いた。岡崎の教室で。

01 行目から 03 行目では、企業に雇われる日本語の先生にどのようにすればなれるかについて話している。そのことについて、F017 は 14 行目で「で、聞いてみたのね、そのやってる人に。」と切り出し、05 行目、06 行目で「したら、知り合いがやっぱりそういうところの、あの、何部、じ、人事部なのか何部なのかよくわかんないけど。」と話し始めた。これに対し、07 行目で F102 が「いわゆるコネですね。」と引き継ぐような形で続け、F017 も 017 行目で「そうそうそう」と同意した上で、018 行目にかけて「そういうので、あなた先生やってるからちょっと来てくれない、お給料出すわって話で行ったんだって」と F017 の知り合いが日本語の先生になった経緯を伝え、その後、その人について F102 がどんな立ち位置なのかを推測し、F017 も同意した上で 14 行目で「そういう人がね、何か 2 人いた。岡崎の教室で」と締めくくった。

この会話では、F017 が 08 行目で「-てくれない」と否定疑問形での依頼を行なっている。これは自分とは異なる人の発話をエピソード的に再現しているに過ぎないが、ここで「来てください」ではなく、「来てくれない」という形式をとり、補助動詞「-てくれる」を用いているが、「ちょっと」という表現が共起していることから、強い依頼ではないことが考えられ、許諾・拒否の自由が聞き手に与えられている。そのため、「来て」という強制度の強い依頼表現ではなく、補助動詞「-てくれる」を付与することで、命令度を下げ、依頼を和らげたと考えられる。

また、否定疑問形を用いていることについては、上述した菊池（2017）で述べられていた、否定疑問形は、相手に押し付ける感じが弱く、否定する余地を多く与えるような印象を与えるがゆえに肯定疑問形よりも丁寧な感じがすることに起因すると考えられる。会話例 1 で出現した依頼内容は「ちょっとこっちに寄る」というすぐにできる・手間のかからない・確実にできる内容であり、依頼をする側としてもされる側としても負担度の低いものであった。それに対し、この会話例で出現した依頼内容は「日本語の先生として来る」という長期的に引き受ける必要のある・手間や時間のかかる・難しい内容であり、依頼の負担度が高いものである。そのため、押し付ける感を弱める否定疑問形の形を取ったと考えるのが妥当なように思われる。

また、依頼用法の「-てくれる」は今から行なう行動について依頼を行なうため、過去形で使うことは不可能である。過去形で過去の依頼内容に言及した場合、それは、過去の依頼の達成を「確認」する働きを有する。次節で、その会話例を検討する。

5.1.4. 会話例 4：ちゃんと私の代わりに言っといってくれた？（名大会話コーパス・データ 004）

この会話は、【A が B に】対して発話している。二人の関係性は【大学時代の部活の友人】であり、会話が行なわれたのは【車の中】である。活用形式は【てくれた】で、共起表現は【言っておく】であった。発話は、【前日 A が欠席した総会について話している】場面で行なわれ、A の発話の目的は【B が自分の代わりに欠席についての謝罪を先輩にしたかどうかを確認すること】である。

[名大会話コーパス・データ 004]

01A：ごめんね。あの日私行かんくって。

02B：行かんでよかったよ、あれ。

((中略))

03A：あたしもあんたにあたしもあんたに連絡すればよかったね。ごめんね。

04A：ちゃんと私の代わりに言っといってくれた？今日は申し訳ないんです。

05A：欠席しているんですがとかいって。＜笑い＞

06B：言うわけない。

07A：まーじで、あんたほんと気が利かんねえ。

08B：利くわけない。

09A：ほんと気が利かんね。

10B：言っといたよ。

11A：ありがとうございます。

12B：言っといたよ。

13A：ありがとうございます。ほんとありがとう。

01 行目のAの「ごめんね。あの日私行かんくって。」という前日の総会欠席についての【謝り】に対し、Bは02行目で「行かんでよかったよ、あれ。」と応答している。その後、中略部分で、AとBは、先輩からの総会の連絡が遅かったため、Aにバイトが入ってしまい、行けなくなったという話をしている。続いて、Aは03行目で「あたしもあんたに連絡すればよかったね」と反省し、「ごめんね」と前置きした上で、04行目で「ちゃんと私の代わりに言っといってくれた？」と、その日、Bが自分の代わりに先輩に謝罪したかどうかの【確認】を行なっている。Bは06行目で「言うわけない」と冗談交じりに応答し、11行目で「言っといたよ」と【確認】に対する肯定をし、最後にAの感謝と謝罪で会話を終えた。

この会話では、Aが04行目で「-てくれる」の過去形「-てくれた」を用いている。過去の出来事についての話であるので、これは【依頼】ではなく、依頼した内容の達成を【確認】したのである。

5.1.5. まとめ

以上のことから、【依頼】用法では、現在形の活用形式が用いられる。会話例2の敬体の使用に関しては、その箇所以外が常体で発話されていたことから、依頼の負担度が高いと話し手が判断した際に、意図的に敬体を使用している可能性がある。時間や手間のかかる行為を依頼する際には、敬体を使用することによって、多少なりとも丁寧な印象を与えようとするのではないだろうか。同様に、肯定疑問形と否定疑問形の使い分けについても、依頼の負担度に合わせ、負担度が高いと判断した場合に、話し手は否定疑問形を選択していると考えられる。

補助動詞「-てくれる」を用いた依頼で共通する点として、この依頼は、軽視的な依頼ではなく、受諾・拒否の選択の自由が聞き手に大きく委ねられているものであることを指摘できる。補助動詞「-てくれる」を付与する理由は、言い切りによる命令的なニュアンスをやわらげ、相手の選択の自由を強めると共に、自分はその行為の結果や影響を受ける立場であり、それが自身にとって恩恵的でありたい行為であることを示す点にある。その中で、比較的負担度が高いと話し手が判断する事柄に対しては、敬体や否定疑問形を選択し、押し付ける感を弱めているのである。

5.2. 【非難】用法

以下では、【非難】用法の補助動詞「-てくれる」について分析・考察を行なう。

5.2.1. 会話例1「やめてくれる」(名大会話コーパス・データ 046)

この会話は、【F 3 がM 1 に】対して発話している。二人の関係性は【高校の同級生】であり、会話が行なわれたのは【F 3 の部屋】である。活用形式は【てくれる】で、共起表現は【やめる】であった。発話は、【F 3 が説明したがない事柄についてM 1 がしつこく聞き続けている】場面で行なわれ、F 3 の発話の目的は【M 1 のその行動を非難する】ことである。

[名大会話コーパス・データ 046]

- 01F3：うーん、わかんない。
02M1：わかんないじゃ困るでしょう。
03M1：毎日一緒にいるんだから、そんなにしゃべることはねえよ。
04F3：そういうこと言わないで。
05M1：なんで？何、そういうこと言わないでって。(うーん) 何、知られちゃまずいの？
06M1：知られちゃまずいの？
07F3：うるさいな。
08M1：知られちゃまずいの？
09F3：うるさい。
10M1：知られちゃまずいんだ。
11F3：うるさいって言ってるの。
12M1：知られちゃまずい。***なあ。
13F3：うるさい。
14M1：そうやって人の顔をけるなよ。
15F3：けてないし。
16M1：けたよ。
17F3：はたいたの。そういうさあ、くだんないことやめてくれる。
18M1：なんで、おもしろいじゃん。
19F3：おもしろくないよ。
20M1：なんでよ。聞いてるだけの人に、今が何が起こったのかは、
21M1：ちゃんとは、分からないんだから。
22F3：もう。

F3 と M1 は同級生であり、親しい関係と言える。いろいろな話題を取り上げるが、F3

の 01 行目の「うーん、わかんない」という発話に対し、M1 は 02 行目から 03 行目で、「わかんないじゃ困るでしょう。毎日一緒にいるんだから、そんなにしゃべることはねえよ。」と 2 人の関係性の説明を含みながら反応した。04 行目で、F3 は「そういこと言わないで」と発話するが、M1 は 05 行目から 06 行目で「なんで？何、そういうこと言わないでって。(うーん) 何、知られちゃまずいの？知られちゃまずいの？」と F3 に【質問】を行なった。それに対する 07 行目の「うるさいな」という F3 の反応に対し、M1 は 08 行目で再び「知られちゃまずいの？」と F3 が答えたがらないことについてなおも【質問】を重ねる。F3 は、それを聞いて再び「うるさい」と発話を行った。M1 は、質問に答えないことを【質問】に対する【肯定】と見なし、10 行目で「知られちゃまずいんだ」と結論付け、また、12 行目でも「知られちゃまずい」と繰り返している。この行為に対し、F3 は何度も「うるさい」と不機嫌を露わにして応答している。14 行目以降、F3 と M1 は言い争いをし、F3 は 17 行目で「くだんないことやめてくれる」とここに至るまでの M1 不愉快な行動を【非難】した。ここで、F3 が M1 を非難できたのは、二人の関係性が親しいからであろう。「-てくれる」を用いた非難に限らず、非難という行動は、それを受けた相手の気分を害するものであるため、親しい間柄あるいは上から下にしか基本的に使用されることがない。

上記の補助動詞「-てくれる」は、【恩恵】が最たる用法であるにも関わらず、なぜ【非難】を表すと言えるのだろうか。話し手 (F3) は、聞き手 (M1) の言動のせいで生じた望ましくない状況におかれているが、これは、M1 が言動を改めることで改善できる状況であることは、F3 が何度も「うるさい」と繰り返していることから、M1 にも判断可能である。それにもかかわらず、M1 が「やめる」という選択を行なわないことは、F3 への配慮に欠けた行為であると言える。

ここで、F3 は、「やめてくれない？」と発話する。補助動詞「-てくれる」が、本来、恩恵性を強く有しているものであることを考慮に入れると、この補助動詞を付与することで、「やめる」という行為が F3 にとって恩恵的であることが M1 にも伝達可能であると考えられる。その恩恵的動作を行なっていない、つまり、F3 にとって好ましくない言動を「やめない」という M1 に対し、F3 への恩恵を与えていない現状を【非難】していると言えるのではないだろうか。これは、恩恵・不利益が何も生じていない状況から、恩恵を得ようとする【依頼】とは異なり、不利益が生じている状況から、不利益の解消を求める行為である。そのため、【依頼】以上に、現状の不利益を諫める【非難】としての役割を果たしている。

5.2.2. まとめ

非難という言語行為上、この用法を目上の人や親しくない相手に使うことはあまりないが、【非難】用法としての補助動詞「-てくれる」は、現状の望ましくない行為・状況に対

して、それを改善する行為をしていない事を非難することができる。その行為をすることを依頼しているとも言えるが、単に恩恵を得るために依頼する以上に、「話し手にとって不快な現状の改善」がなされていないことへの不満や怒りが含まれているという点で非難であると考えべきであるだろう。

5.3. 【皮肉】用法

以下では、【皮肉】用法の補助動詞「-てくれる」について分析・考察を行う。

5.3.1. 会話例「問題起こしてくれる」(名大会話コーパス・データ 108)

この会話は、【F7 が F6 に】対して発話している。2 人の関係性は【仕事上の知人】であり、会話が行われたのは【レストラン】である。活用形式は【てくれる】で、共起表現は【起こす】であった。発話は、【F7 が大学院の院生について話している】場面で行われ、F7 の発話の目的は【修士論文の学生たちの行動を皮肉的に F6 に伝える】ことである。

[名大会話コーパス・データ 108]

01F7：ま、いいや、いいや、食べましょう、せっかくだから。

02F6：はい、はい。なら早く言ってよ (<笑い>)、本当だ。

03F6：うん、注文すればよかったね。じゃ、本当に年末の短い時間お帰りになった。

04F7：そう。でも、ま、いろいろ、おもしろい、帰ってきて、いろいろとありまして

05F7：<笑い>、あまり言うとかれ、問題だから<笑い>、おもしろい*けんかい*。

06F6：あ、そうですか、え、お、おうちに帰られて。

07F7：違う違う違う、しゅ、修士論文の学生たちは。(あー、<笑い>)

08F7：もー、本当にもーいろいろとまあ、問題起こしてくれる。<笑い>

09F6：<笑い>油断も隙もならないってやつですか。<笑い>

10F7：そう、油断も隙もならなくてもう、(ふーん) うん。

11F7：(そうねー、先生) したからね、みんなね。

12F6：日本人だってね。

13F7：ねー、そうなの。

14F6：うん、日本人だって (うん) 自分のこともやっぱりちゃんとままならない

15F6：(うん) 人たちがたくさんいるので、(うん、そうなの) うん。(うん) ふーん。

16F7：Lは知らないよね、Q【国名】の。(うん) うん、取ってないからね、(うんうん)

17F7：かの、彼女はMの出身だからね。

18F6：ふーん、じゃ、学部が

19F7：うん、M。

20F6：Mで、んで、コースだから。

この断片の前に、F6 と F7 はレストランで注文した料理についてセットメニューについて見落としがあったことを話しているが、01 行目で F7 は「ま、いいや、いいや、食べましょう、せっかくだから」と食べることを促し、02 行目で F6 は「はい」と応じ、その後 03 行目で「じゃ、本当に年末の短い時間おかえりになった」と話題を転換している。どこに帰ったかは会話データ内には明記されていないが、少なくとも、セットメニューの話から話題転換を行なったことは明らかであろう。04 行目で、F7 は「でも、ま、いろいろ、おもしろい、帰ってきて、いろいろとありまして」と帰ってきて以降の話を始めようとするも、「あまり言うとか、問題だから」と前置きしている。それに対し、F6 は 06 行目で「あ、そうですか、え、お、おうちに帰られて」と「家へ帰って問題があったのか」と【確認】を行なったが、F7 は、07 行目と 08 行目で「違う違う違う、しゅ、修士論文の学生たちは。も一、本当にいろいろとまあ、問題起こしてくれる」と発話を行い、「修士論文の学生達が問題を起こした」ことが「いろいろあったこと」の内容であると明かす。

ここで、「問題起こしてくれる」に「てくれる」が付いているが、「問題を起こす」ことが、F7 にとって恩恵的であるとは到底考えられない。更に、09 行目以降を見ると、F6 と F7 は修士論文の学生たちの「問題を起こす」という行為は、11F7「したからね、みんなね」12F6「日本人もね」という発話から分かる通り、修士論文の学生に「よくあること」のようであり、どうやら改善を求めているわけではないようである。つまり、この 08 行目の F7 の発話は、単に不平・不満を愚痴のようなものとして口に出しているだけと考えられる。

本来、恩恵性を感じることに用いられる補助動詞「-てくれる」を、この望ましくない行為にあえて付与して発話することで、「思っていることと反対のことを言う」皮肉を口に出していると考えられる。この断片では、その場にいない第三者に対して皮肉を口に出しているが、例えば喧嘩中の会話参加者の会話中であれば、このような用法での「-てくれる」が現れることも考えられる。また、本来、「-てくれる」は恩恵性を示すため、【皮肉】用法において、共起する動詞は誰から見ても明らかに望ましくない事、あるいは会話参加者の共通認識として望ましくない事である必要があると考えられる。

5.3.2. まとめ

以上から、【皮肉】用法は、積極的な改善を求めている「望ましくない行動」に対し、あえて、迷惑・被害とは反対の恩恵感情を示す補助動詞「-てくれる」を付与することで、それを皮肉として表していると考えられる。使用の間柄は、やはり密接な関係が好ましく、なおかつ、皮肉という行為自体、それを受けるのが望ましくない行為であるため、親しい間柄であっても、聞き手に対して用いるよりは、その場にいない第三者に用いる方が一般的であると言える。

5.4. 補助動詞「-てくれる」の【恩恵】以外の用法

ここまで、日本語母語話者の実際の会話データの分析をもとに、補助動詞「-てくれる」の【依頼】【非難】【皮肉】用法について考察を行ってきたが、これらすべての用法において、恩恵的な要素が影響を与えていると言っていいだろう。【依頼】用法は、その行為の受け手となることを望ましい、言い換えるならば、「自分は恩恵を与えてもらう立場である」と話し手が感じていることを表明することで、聞き手に依頼を受諾してもらう可能性を高めている。【非難】用法は、あえて恩恵的要素のある補助動詞「-てくれる」を付与することで、その恩恵的な行動を現在行っていない聞き手が、話し手への配慮に欠けていることを暗示していると言える。更に、【皮肉】用法は、話し手にとって好ましくない事柄に、恩恵性のある補助動詞「-てくれる」を付与することで、実際に話し手が思っていることと反対のことを表明し、皮肉的に物事を評価している。このように、補助動詞「-てくれる」は、従来、恩恵性を中心に論じられてきたが、その恩恵的な意味が根底に存在しているからこそ、これら、【依頼】【非難】【皮肉】の用法でも用いることができるのである。

6. 日本語教育における提案

では、補助動詞「-てくれる」の【依頼】【非難】【皮肉】用法は、どのように日本語教育の現場に取り入れられるべきであろうか。親疎や上下関係、丁寧さ、さらにはその行為自体の好ましさに関わってくる用法であるため、「どのような相手に」「いつ」使用可能な表現であるかを学習者に教えることは必須であろう。中途半端な理解のままに使用することは、人間関係に亀裂を生じさせる危険性もあるため、教える際には十分な注意が必要な表現である。

本稿で取り扱った補助動詞「-てくれる」の【依頼】【非難】【皮肉】用法は、一般的な【恩恵】用法と比べると、初級段階で学ぶ必要がない。【依頼】用法であれば、他の表現で代替可能であり、【非難】【皮肉】用法は、初級段階の学習者では、使用機会自体がほとんど訪れないと考える。そのため、指導する段階としては、中上級以降の学習者を対象とすべきであると判断した。中上級学習者であれば、既に活用などは十二分にできるだけの能力がある段階に達しているため、活用などの初歩的なことを教える必要はなく、「いつ」「どこで」「誰に」などの文脈的な指導を行なうべきであると考え。そのためには、どのような場面が使用場面として好ましく、どのような場面が好ましくないのかを学習者に十分に示す必要がある。そこで、本章では、いくつか作例を作ることを通して、学習者に、使用場面を明示的に示す方法を検討する。

使用場면을示すにあたって、まずは、1) 誰が誰に、2) どのような関係性のもとで発話したものかをはっきりさせる必要があるだろう。また、会話のシーンを想像しやすくするために、その会話が行なわれた3) 場所も示す。活用形式の変化によって丁寧さの程度を変更することが可能なため、4) 活用形式も意識的に提示すべきである。更に、5) 共起表現を示すことで、依頼内容の負担度を考慮する視点も示唆したい。最後に、その発話

がどのような文脈で行なわれたのかを6) 場面として説明し、その発話で何をしようとしたのかといった7) 目的（ここでは、【依頼】【非難】【皮肉】が主となる）も示す。

6.1. 【依頼】の「-てくれる」作例

【依頼】用法の補助動詞「-てくれる」の使用に関しては、「親しい相手」への「軽い」依頼に使用することを理解させる必要がある。そのため、まずは、正しい使用場面の作例を検討する。

6.1.1. 作例1：【依頼】の「-てくれる」正しい使用場面

誰が誰に	AがBに
関係性	友人
場所	教室
活用形式	-てくれる
共起表現	貸す
場面	Aがペンを忘れたことに気付く
目的	Bにペンを貸してもらえるように依頼すること
01A：あ、ペンがない。ごめん、ペン <u>貸してくれる</u> ？ 02B：いいよ。はい。 03A：ありがとう。 04B：ううん。	

この会話は、友人同士の会話である。Aはペンを忘れたことに気づき、01Aで「ごめん」という前置きをした上で、Bに「ペン貸してくれる？」と依頼を行なっている。Bは02Bで「いいよ。はい。」と依頼を受諾し、ペンを貸した。「ペンを貸す」という依頼内容の負担度は低く、気楽な気持ちで友人に頼めることであるため、補助動詞「-てくれる」を使用することが可能である。

前章で述べたように、補助動詞「-てくれる」を用いずに「ごめん、ペン貸して」という形式を用いることも可能である。しかし、あえて「-てくれる」を付与することによって、その行為が恩恵的であることを示すと同時に、ともすれば命令のように聞こえる「貸して」という言いきりの形を柔らかくし、人間関係の円滑化にも貢献している。

【依頼】用法の補助動詞「-てくれる」の導入として、このような「親しい相手」への「軽い依頼」を扱う作例を、正しい使用場面としてまず提示する。続いて、「軽い」依頼であっても、親しい間柄ではない「見ず知らずの相手」に依頼する場合の作例を検討する。

6.1.2. 作例2：【依頼】の「-てくれる」誤った使用場面（親疎関係に着目して）

誰が誰に	AがBに
関係性	見ず知らずの人（同年代）
場所	共通テストの会場
活用形式	-てくれます
共起表現	取る
場面	Aが消しゴムを落とした
目的	Bに消しゴムを取る（拾う）ように依頼すること
（試験開始前に） （（Aが消しゴムを落とした）） 01A：すみません。その消しゴム <u>取</u> てくれます？ 02B：え…？ 03A：消しゴム。 <u>取</u> てくれます？ 04B：え、ああ。（（消しゴムを取って渡す）） 05A：ありがとうございます。 06B：…。	

AとBは初対面で、共通テストの試験会場で隣に座っているという設定である。Aは消しゴムを落としたため、01Aで、「すみません。その消しゴム取てくれます？」という依頼を行なうが、Bは初対面の相手からのこの発話に困惑している。Aはそれに対し、03Aで再び、「消しゴム。取てくれます？」と依頼を繰り返す。Bは04Bで戸惑いながらもAに消しゴムを渡し、依頼を受諾した形となる。

この作例において、依頼内容は「消しゴムを取る（拾う）」ことであり、その負担度は作例1同様低いと言える。しかしながら、初対面の間柄において、親しさや気軽さを含む、補助動詞「-てくれる」を付与した依頼を行なうと、相手を驚かせる可能性がある。この作例では、補助動詞「-てくれる」の【依頼】用法は、ある程度親しい間柄でないと使いにくいことを学習者に示すことを狙いとする。初対面という「疎」にあたる関係性の相手には、たとえ敬体の「-てくれます」を用いたとしても、使用が不適切となることを示すことで、補助動詞「-てくれる」の【依頼】用法の使用可能な相手を教授できると考える。

しかしながら、この形式は、否定疑問形にすることによって、ある程度容認される可能性が高まることも合わせて教授できる。「取ってくれませんか？」の形式であれば、丁寧さの度合いが高まり、聞き手に不快な感情を与えることなく依頼を行なうことができるため、その点もあわせて教授することが望ましい。

「親」関係での使用が可能であることを、作例1、2から示したが、「親」の関係性であっても、補助動詞「-てくれる」を付与した依頼は不適切となる場合がある。そのため、次の作例では、そのケースに着目した誤った使用例を示す。

6.1.3. 作例3：【依頼】の「-てくれる」誤った使用場面（依頼内容の負担度に着目して）

誰が誰に	AがBに
関係性	親しい友人
場所	Aの自宅
活用形式	-てくれる
共起表現	貸す
場面	Aがスマホで欲しいカバンを見ている
目的	Bにお金を貸すよう依頼すること
01A：え、このカバン、明日発売じゃん。え～、欲しいなあ。 02B：どれ？うわ、5万円もするの？高くない？ 03A：まあね。う～ん、今月、これ以上使うと食費がピンチなんだよね…。 04A：ねえ、B。来月絶対に返すから、 <u>お金貸してくれる</u> ？ 05B：えっ…。	

この会話は、親しい友人関係にあるAとBの間で行なわれている。Aは自身のスマホを見ながら、明日発売のカバンに対して01Aで「え～、欲しいなあ」と感想を述べる。それに対し、Bは02Bで、「どれ？」と問いかけ、そのカバンに対して「うわ、5万円もするの？高くない？」とAに同意を求める形での問いかけを行なう。Aは03Aで「まあね」とその値段の高さに同意した上で、「今月、これ以上使うと食費がピンチなんだよね…。」という発話で、自身が金欠状態に置かれていることを表明する。その上で、04Aで「ねえ、B。来月絶対に返すから、お金貸してくれる？」と依頼を行ない、Bは05Bでその依頼への困惑を示しているという作例である。

親しい友人間であるため、このような会話が冗談の一種として行われる可能性もゼロではないが、一般的に「高い」と判断される金額が関わる依頼であるため、依頼する側としても、される側としても、非常に負担度の高い依頼である。そのため、補助動詞「-てくれる」の付与によって、受諾・拒否の選択の自由を聞き手側に与えたとしても、心証はあまりよくないだろう。この作例では、補助動詞「-てくれる」の【依頼】用法においては、「親」の関係性にあつたとしても、負担度の大きい依頼内容での使用が不適切であることを学習者に伝えることを狙いとしている。

また、同時に、「-てくれない」という否定疑問形の形では容認度が上がることも合わせて教授することが望ましい。「疎」の関係性にある相手への依頼だけでなく、依頼内容の負担度が高い場合にも、補助動詞「-てくれる」を用いた依頼は、否定疑問形の使用が好ましいことを教授することを勧める。

以上、【依頼】用法における補助動詞「-てくれる」の作例検討を行なった。【依頼】用法においては、「親しい相手」への「軽い」依頼に用いることを明らかにする必要がある。そのため、正しい使用場面の作例に合わせ、「疎」の関係性にある相手への依頼や、「(負担度の) 重い」依頼における誤った使用場面の作例を提示することで、適切な使用場面の理解を促すことが望ましいと考える。

6.2. 【非難】の「-てくれる」作例

【非難】用法の補助動詞「-てくれる」は、理解のみ必要な用法であるが、【依頼】用法と異なり、活用形式を変えたとしても、安易に使用すべきではないことと、「親しい間柄」あるいは「上の立場から下の立場」でのみ使用が不可能であることを伝える必要があると考える。まずは、適切な使用場面の検討を行なう。

6.2.1. 作例4：【非難】の「-てくれる」正しい使用場面

誰が誰に	B が A に
関係性	同級生
場所	朝の教室
活用形式	-てくれる
共起表現	やめる
場面	A が真面目に課題に取り組んでいる B の邪魔をしている
目的	話しかけたり、強引に誘ったりすることに対して非難をすること
01A：あ、B ちゃん。おはよ～。 02B：おはよう。 03A：何してんの？課題？やっぱり B ちゃんって熱心だなあ。 04B：A 君は C 先生の授業の課題終わったの？ 05A：まだ。ところでさ、今週末、新作の映画が上映されるらしいよ。 06A：B ちゃんも一緒にどうかなって思ってた。どう？行かない？ 07B：え？課題の提出日がいつか分かってる？ 08A：今週の日曜日。でも、メールでも送れるだろ？ 09B：そう。でも、あたしはゼミの発表もバイトもあるし、早く終わらせたいの。 10A：B ちゃんは真面目すぎ。ゼミの発表は来週でしょ？ 11A：バイトも毎日するわけじゃないじゃん。 12B：私は早めに完成させないと落ち着かないんだってば。 13A：明日と明後日にやればいいじゃん。 14B：ねえ、うるさい。 15A：今週末行こうよ。いいでしょ？ 16B：もう！ちょっと、 <u>やめてくれる</u> ？あたしは課題に集中したいの。	

17A：そんなに真面目にやらなくてもいいのに。

18B：ほっといて。

この会話は、同級生である A と B の間で行なわれている。朝、教室で課題をやっている B に対し、A は、05A で、「ところでさ、今週末、新作の映画が上映されるらしいよ。」と話題を切り出し、06A で、「B ちゃんも一緒にどうかなって思ってさ。どう？行かない？」と一緒に映画を見に行かないかと勧誘を行なっている。これに対し、B は明確な返答を避けながらも、07B「え？課題の提出日がいつか分かってる？」、09B「あたしはゼミの発表もバイトもあるし、早く終わらせたいの。」といった現在 B が置かれている状況を説明することで、暗に誘いを断っている。しかし、A は、それに諦めることなく、08A「でも、メールでも送れるだろ？」、10A「ゼミの発表は来週でしょ？」、11A「バイトも毎日するわけじゃないじゃん。」、13A「明日と明後日にやればいいじゃん。」と、B の説得を試みる。この説得は、B にとって好ましい行為ではなく、B は、14B で「14B：ねえ、うるさい。」と A に厳しい言葉を向ける。それでもなお、A は 15A で、「今週末行こうよ。いいでしょ？」と勧誘を繰り返しており、度重なる勧誘が B にとって迷惑かつ好ましくないものであることが分かる。

ここで、B は 16B で「もう！ちょっと、やめてくれる？課題に集中したいの」と、補助動詞「-てくれる」を付与した形式で発話する。この発話は、今現在、B を取り巻く状況、具体的には A がしつこく勧誘を繰り返してくる状況が、B にとって好ましくないものであり、「勧誘をやめる」という行動をとらない A の判断が B への恩恵意図、配慮に欠けていることを非難している。このように、現状の好ましくない状況を改善できる行動に補助動詞「-てくれる」を付与することで、その行為を行っていない点で配慮に欠けている現在の相手を非難することができるのである。このように、明らかに話し手にとって迷惑な状況を作例として提示することによって、補助動詞「-てくれる」の【非難】用法を学習者に分かりやすく提示できるのではないかと考える。

しかし、この表現は人間関係に悪い影響を与えかねないものであり、親しい間柄以外で使用了場合、後々までその悪い影響が尾を引き、人間関係を壊す可能性がある点に注意が必要である。次節では誤った作例の検討を行なう。

6.2.2. 作例 5：【非難】の「-てくれる」誤った使用場面

誰が誰に	A が B に
関係性	部下（A）と上司（B）
場所	会社のオフィス
活用形式	-てくれません
共起表現	やめる
場面	上司の B が部下である A に多くの仕事を依頼する
目的	上司の B が多くの仕事を依頼してくることを非難する

01A：B 課長、この間頼まれたレポートが完成しました。ご確認をお願いします。
 02B：ご苦勞様。あとで確認するよ。ところで、ちょっと頼みがあるんだけど。
 03A：はい。何ですか？
 04B：来週、取引先に新しい計画書を持って行かないといけないんだ。
 05B：けど、一応作ったけど、データもそれに関係した写真も全然足りなくて。
 06B：ちょっと補足と編集をしてほしいんだけど、お願いできるかな。
 07A：今、他の計画書を書いていて…。いつまでの書類ですか？
 08B：来週の月曜日に行くから、今週中に頼むよ。
 09A：そうですか…。
 10B：あと、もう一つお願いがあるんだけど、取引先用のお土産を買ってきてほしい。
 11B：あ、そうだ。それから…。
 12A：課長、私にばかり頼むのはやめてくれませんか？全部私がやるのは無理です。

この会話において、AとBは部下、上司の関係であり、AはBからたくさんの仕事を言いつけられているという場面設定である。話しかけてきたAに対し、Bは02B「ところで、ちょっと頼みがあるんだけど。」と話を切り出す。03Aの「はい、何ですか？」という受諾、質問に対し、Bは04B、05B、06Bで、取引先に持っていく計画書の補足と編集をAに依頼した。07A「今、他の計画書を書いていて…。いつまでの書類ですか？」と、明確には断らないものの、自身に余裕があまりないことを表明し、期限の確認を行なった。ここで、Aの仕事状況に余裕がないことは、AとBの間の共通認識となっている。また、08B「今週中に頼むよ。」という回答に、09A「そうですか…。」とAは受諾とは言えない態度を見せている。その様子に構うことなく、Bは10B「あと、もう一つお願いがあるんだけど、取引先用のお土産を買ってきてほしい。」、11B「あ、そうだ。それから…。」とさらなる依頼を重ねようとする。そこで、Aは12Aで「課長、私にばかり頼むのはやめてくれませんか？」と非難を行なった。

上述の補助動詞「-てくれる」は【非難】用法での使用であるが、この場面での使用は避けなければならない。なぜなら、自分への恩恵性・配慮に欠けている行動であると上司に主張することは、相手を責めるような発言として捉えられ、無礼であるという印象を与えかねないためである。この無礼さは、否定疑問形や敬体にした場合でも和らぐことはほばない。このような状況においては、「お土産のことならCさんの方が詳しいと思うので、Cさんにお願ひしませんか？」という代替提案や、「申し訳ありませんが、どうしても余裕がないので、他の方にお願ひしていただけないでしょうか」などの断りが適当となる。

【依頼】用法の場合とは異なり、活用形式を変えても使用を避けるべき用法であることを学習者には強調するべきであろう。学習者の使用を目指すわけではないため、使用のリスクを伝えられれば十分であると考えらる。

6.3. 【皮肉】の「-てくれる」作例

最後に【皮肉】用法の補助動詞「-てくれる」の作例について考える。【非難】用法同様、理解ができれば十分な用法である。「親しい間柄」でのみ使用が可能であることと、本人を前にした使用は控えるべきであることを伝える必要があると考える。まずは、適切な使用場面の検討を行なう。

6.3.1. 作例6：【皮肉】の「-てくれる」正しい使用場面

誰が誰に	A が B に
関係性	大学時代からの親友
場所	喫茶店
活用形式	-てくれた
共起表現	投稿する
場面	A が自分の仕事について話している
目的	A の教え子の取った行動を皮肉的に伝える
01A：仕事はどう？順調？ 02B：まあ、ぼちぼち。A は？高校の教師って結構大変じゃない？ 03A：まあ。そっちも大変でしょ？ 04B：そうだけど、A は子どもに関わる仕事じゃん。 05B：自分より若い子たちにどう接すればいいかって難しそう。 06A：あ～、それはそう。 07A：今の子たちってなんでもすぐ SNS に投稿するから困ってるんだよね。 08B：え、そうなの？ 09A：この間、宿題を締め切りまでに提出しない子がいたから注意したんだけど、 10A：その子が SNS に僕の悪口を色々と <u>投稿してくれた</u> んだ。 11B：え、本当？SNS に投稿する必要ないじゃん。 12A：まあでも、最近の子どもたちってこうらしいから、しょうがないかなって。	

この会話では、A と B は大学時代からの親友である。まず、A が B の仕事について尋ねた後、B が 02B で「A は？高校の教師って結構大変じゃない？」と質問を返している。それに対し、A は 03A で「まあ」と同意し、「そっちも大変でしょ？」と再び質問を返す。B は、04B で「そうだけど」と同意をした上で「A は子どもに関わる仕事じゃん」と、再び A の仕事の話に話題を戻し、05B で「自分より若い子たちにどう接すればいいかって難しそう。」と、子どもに関わる A の仕事だからこそその難しさに言及している。それに対し、A は、06A で「あ～、それはそう」と納得を示した上で、07A で「今の子たちってなんでもすぐ SNS に投稿するから困ってるんだよね」と、今の子たちの行動に困っていることに話を展開する。それは B の知らない情報だったため、B は 08B で「え、そうなの？」と問い

かけ、Aは09A「この間、宿題を締め切りまでに提出しない子がいたから注意したんだけど」、10A「その子がSNSに僕の悪口を色々を投稿してくれたんだ。」と、最近の子どもがすぐにSNSに投稿することについて、自身が受けた「悪口を投稿される」という被害について話した。Bが、11B「え、本当？SNSに投稿する必要ないじゃん。」と驚きを示したのに対し、Aは、12A「まあでも、最近の子どもたちってこうらしいから、しょうがないかなって。」と諦めを見せている。

この作例では、Aは、自分の教え子がSNSに自身の悪口を投稿した行為について、Bに皮肉的に語っている。自分への悪口を投稿されることは、Aにとって、決して恩恵的とは言えない行為である。その「投稿する」という行為に、あえて恩恵意図のある補助動詞「-てくれる」を付与することによって、皮肉的にこの出来事をBに伝達している。「投稿したんだよね」と、補助動詞「-てくれる」を付与せずに発話した場合は、この発話は単なる事実の伝達となる。しかし、補助動詞「-てくれる」の付与によって、実際は恩恵的と感じていないにも関わらず、恩恵を感じているかのような発話となり、皮肉的な発話となっているのである。

この作例では、【皮肉】用法の補助動詞「-てくれる」は、「親しい間柄」での使用が原則であることを強調する。また、ここで皮肉の対象となっているのは、この会話に参加していないAの教え子であり、行為者に対して直接的に皮肉を表明している訳ではない。学習者に対しては、皮肉の対象は、親疎関係に影響を受けにくい、本人を前にして発言する場合は容認されづらく、注意が必要であることを教授すべきである。次に、誤った使用場面の作例を検討する。

6.3.2. 作例7：【皮肉】の「-てくれる」誤った使用場面

誰が誰に	AがBに
関係性	ホテルのアルバイトの先輩Aと新人B
場所	食堂
活用形式	-てくれた
共起表現	無視する
場面	BがAの指示通りの仕事をしていなかったことが、Aに知られた
目的	Bの行動について皮肉を言う
01A：Bくん、ちょっと来て。 02B：はい。なんですか？ 03A：トイレの掃除まだ終わってないよね？ベッドも片付けてない。 04B：さっき、Cさんにちょっと手伝ってほしいと呼ばれていたんです。 05B：だから、トイレの掃除はまだ途中で、ベッドの片付けもまだ…。 06A：2時までにはやってって言ったのに、僕の指示を <u>無視してくれたんだね</u> 。 07A：はい……。あの、本当にすみませんでした…。	

この会話は、ホテルでアルバイトをしている先輩アルバイト A と新人アルバイト B の間の会話である。A は 01A で「B くん、ちょっと来て。」と B に呼びかけ、03A で「トイレの掃除まだ終わってないよね？ ベッドも片付けてない。」と B の仕事の不十分さを指摘する。それに対して B は 04B で「さっき、C さんにちょっと手伝ってほしいと呼ばれていたんです。」と自身の仕事が終わっていないことの理由の説明を行なった。A は B が自身の指示に従うことなく、勝手な行動を取ったことを不満に思い、06A で、「2 時までにはやってって言ったのに、僕の指示を無視してくれたんだね。」と皮肉を口にし、B は 07B で謝罪を口にした。

この場面で、A は、目の前にいる B に皮肉を口にしているが、A が先輩であり、目上の立場の人間であるからといって、新人である B にそのような表現を口にしていいいわけではないことを教授する必要がある。皮肉は、直接的な注意よりも相手に不快な感情を与える可能性が高い。単なる注意ではなく、聞き手の行動をわざわざ皮肉的に表現し、暗に責めるような発言は、今後の聞き手との人間関係にマイナスの影響を与える可能性がある。そのため、互いの関係性がどのような形であったとしても、聞き手自身に対する皮肉を口にすることは、極力避けるべき表現であることを教授するべきである。

6.4. まとめ

本章では、作例をもとに、補助動詞「-てくれる」の【依頼】【非難】【皮肉】用法のそれぞれについて、どのような点を中心に指導していくべきかを検討した。

学習者が実際に使用にまで至るのは、主に【依頼】用法であると思われるが、親疎関係や依頼内容の負担度に応じて、常体と敬体、肯定疑問形と否定疑問形の使い分けを行なう必要があると考えられるため、その点を重点的に指導すべきである。敬体や否定疑問形を用いることで、軽い依頼内容の際、目上の人や、親疎関係の「疎」にあたる人にも、補助動詞「-てくれる」を使用した「受諾・拒否の自由を聞き手に委ねた形での依頼」が可能となるため、学習者のコミュニケーション能力の向上が見込まれる。もし、そこまでの細かい使い分けを理解することが負担となる場合には、「-てくれない」「-てくれませんか」に絞り、相手が「親しい」「同等か目下」の相手であるか、「親しくない」「目上」の相手であるかによる使い分けを指導する方法を提案する。否定疑問形は、肯定疑問形よりも押しつけがましさを減らし、軽い依頼にも重い依頼にも使用でき、相手の選択を尊重できる。肯定疑問形よりも否定疑問形の使用を促すことで、学習者の不利益になるような状況の発生を防ぐことができると考えられる。【非難】用法は、親しい間柄であれば使用可能な用法ではあるものの、かなり相手を強く攻める意味合いが含まれるため、人間関係に亀裂を生じさせる可能性があり、基本的に使用は避けるべき表現である。最後に、【皮肉】用法については、親しい間柄の聞き手に対し、第三者の行動に対する皮肉を伝える場合は使用可能だが、聞き手への皮肉を口にすることは、人間関係への負の影響を与えかねない。そのため、【非難】【皮肉】用法に関しては、学習者自身の使用は目指さず、聞いて理

解ができるようになるだけで十分であると考え。理解の必要性に関しては、【非難】【皮肉】用法の補助動詞「-てくれる」を含む発話への適切な応答が必要となる場合が存在すると考えられるためである。生活者としての日本語学習者であれば、【非難】や【皮肉】を受ける可能性がゼロとは言い切れない。その際に、【恩恵】用法として補助動詞「-てくれる」の付与を認識した上で、不適切な応答を行なった場合、不必要なトラブルに発展する可能性がある。そのため、聞いて理解ができ、適切な応答ができるようになることを目標として教授することは重要であると考え。

7. おわりに

本稿では、従来【恩恵】用法にばかり注目されてきた補助動詞「-てくれる」のその他の用法について分析・考察を行なった。その結果、【依頼】【非難】【皮肉】用法が、実際の母語話者の会話には観察されることが分かり、これらの用法は、補助動詞「-てくれる」の恩恵性という要素を活かしたものであることが明らかとなった。

これらの用法を日本語教育にどのように取り入れるべきかを検討した結果、【依頼】用法は、常体・敬体、肯定疑問形・否定疑問形の使い分けによって、相手の受諾・拒否の選択の自由度を尊重した依頼表現として用いることができるため、親疎関係や依頼内容の負担度を提示しながら適切な使用場面、使用形式を導入していくことを提案した。【非難】

【皮肉】用法に関しては、まず、使用場面がかなり限られることを示す。そのうえで、このような用法が存在し、実際に使用することはできるものの、人間関係にマイナスの影響を与えかねないことを説明する。この用法は、理解にとどめ、使用は避けるように指導する必要がある。理解を促す指導の必要性としては、特に生活者としての日本語学習者が、日常生活の中でこのような表現に接する可能性があることが挙げられる。【非難】【皮肉】として用いられた補助動詞「-てくれる」を【恩恵】用法と勘違いすることは、学習者の適切な不適切な応答に繋がる危険性があるためである。よって、【非難】【皮肉】用法に関しては、理解のみを目指す形で指導していくことが望ましいと考えられる。

本稿では、名大会話コーパスを使用した。用法の分類が筆者の主観によるものであったことや、データ数がそれほど多くなかったことから、検討としては不十分な点も多々ある。しかしながら、補助動詞「-てくれる」に、これら【依頼】【非難】【皮肉】用法が存在することは事実であり、指導法について検討していく必要はあると考え、本稿では、その指導法の一提案として作例を使用した指導を提案した。どのような文脈で用いられるべきかについてはより詳細に検討し、より学習者にとって理解が容易な形にしていくべきであり、今後の課題としたい。

参考文献

- 有馬俊子（1994）『日本語の教え方の秘訣―『新日本語の基礎 1』のくわしい教案と教授法〈下〉』スリーエーネットワーク.
- 市川保子（2005）『初級日本語文法と教え方のポイント』スリーエーネットワーク.
- 尾鼻靖子（2017）「授受表現「クレル」を使った皮肉・非難表現について：「クレル」の恩恵性を再考する」言語と文化，第 20 号，pp.1-15
- 菊池康人（1997）『敬語』講談社
- 金般模（2009）「てくれる」文の基本的意味と周辺の意味との関係」言語科学論集，第 13 号，pp.95-110
- 栗田奈美（2019）「BCCWJ に基づく「てくれる」構文の分析―日本語上級学習者の非用解消に向けて―」拓殖大学日本語教育研究，第 4 号，pp.55-76
- 呉彦妍（2020）「日本人と中国人の依頼場面における負担度に関する意識調査」日本語教育方法研究会誌，第 26 巻，2 号，pp.64-65
- 坂野永理・池田庸子・大野裕・品川恭子・渡嘉敷恭子（2011）『初級日本語 げんき II [第 2 版] ジャパンタイムズ.
- 清水勇吉（2009）「依頼表現に見るポライトネス―性差のかかわりを中心に―」『徳島大学国語国文学』第 22 号，pp.53-35 徳島大学国語国文学会
- スリーエーネットワーク（2009）『みんなの日本語 中級 I 第 2 版』スリーエーネットワーク
- スリーエーネットワーク（2012）『みんなの日本語 中級 II 第 2 版』スリーエーネットワーク
- スリーエーネットワーク（2012）『みんなの日本語 初級 I 第 2 版』スリーエーネットワーク.
- ズルフィカル・ラーマン（2017）「日本語の依頼表現における丁寧度の選択」日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集，32 期：1-18
- 林・炫情、玉岡賀津雄（2010）「韓国語の行為要求型表現とその否定表現の丁寧度に関する研究」山口県立大学学術情報，第三巻，pp.11-23
- 原田登美（2006）「恩恵・利益を表す＜授受表現＞と＜敬意表現＞の関わり：特に「てくれる」を中心として文法的側面と社会言語学的側面から見る」言語と文化，第 10 巻，pp.203-217
- 藤村逸子、滝沢直宏編『言語研究の技法：データの収集と分析』pp. 43-72，ひつじ書房
- 山本裕子（2007）『「～テクレル」の機能について―対人調節的な機能に注目して―』論文紀要，第三巻，pp.127-144